
メルマガ

NPO 法人市民福祉団体全国協議会・復興支援事務所

NO.4 (2012年6月15日発信)

しっかい!

歩もう	つながろう
支えよう	広げよう
学ぼう	増やそう

★被災地関連情報★

引き続き募集中です!

問い合わせは連絡先へ直接行ってください。

【山元町仮設の女性グループ支援】 中古ミシン提供募集!

連絡先[ささえ愛山元・中村怜子 080-3031-5722]

【就労支援】 たすけあい佐賀緊急雇用募集!

被災地の方、佐賀市で2名就労受け入れます。

研修を受けながら給与支給

連絡先[山田健一郎 0952-23-6950]

【おもかげ雛(前号記事参照)】 希望の方は連絡下さい!

連絡先[安部白道 080-1885-8932]

【「末の松山」と吉田東伍】

(安部 白道)

仙台市に隣接する多賀城市も、甚大な津波被害を受けた町である。和歌「契りきなかたみに袖をしぼりつつ 末の松山 波来さじとは」(後拾遺集)の歌枕で有名な「末の松山」は住宅地の高台にある。含意は「波がくるはずもない末の松山」ということ。そこには今も2本の黒松の巨木が聳えていた。さらに60m下ったあたりには、「沖の石」というこれまた歌枕の名所がある。中古にはさぞ風光明媚な情景が広がっていたことだろう。しかし、今では周囲は完全に宅地化しており往時の面影はない。和歌が身近なものでなくなったせいか、その昔西行や芭蕉が感動して涙したこれらの名所は、今はひっそりとして入念な手入れがなされている様子はいかがえない。

「末の松山」の入り口にある雑貨店主に、被災当日の様子を伺った。「道路で背丈ほど。店の中で1mは浸水したかな。津波が来ると知って、車に食料や暖房衣類を積めるだけ積んで、「末の松山」に逃げた。ものを自宅に取りに戻って亡くなった方もいた」

この店から「末の松山」まではわずか50mほどの距離である。つまり、今回の大津波でも「末の松山」には波は届かなかったことを実感した。古人の言い伝えや和歌を検証して、1200年前の貞観地震の教訓を和歌に学ぶべき、とした先見の師が吉田東伍である。災いは忘れた頃にやって来て、リスクは安定や過信の中に潜む。野田政権の

軽佻浮薄としかいいようのない原発再稼働の報道に、福島の被災者の悔しさで歪んだ顔が重なって仕方がない。自然界から謙虚に、真摯に学び続ける姿勢を忘れてはならない、と叫びたい。



【いわて通信】

(古賀 久恵)(岩手・遠野)

～新しい公共事業 岩手県宮古市 順調にスタート～

市民協会員である NPO 法人ふれあいステーション・あい(宮古)が新しい公共事業として申請した事業は、順調にスタートしました。中身は、①手仕事を通して被災者の方の心のケア、②手仕事を単なる趣味活動から販売へ、③関わるスタッフの育成という3本柱を掲げています。さらに審査員や行政の意向をくみ取り「男性も視野に」入れ、畑を使った活動も行うこととしました。

4月、5月は、コアとなるスタッフが手分けをして“大きくない”仮設住宅や見なし仮設で暮らす方200軒以上を回り、手仕事講習や畑を使った活動などの事前告知をしました。その際に住民の方の声も細かくヒアリングしています。5月29日には、コアメンバーが集まりヒアリングした事柄を発表し、課題を抽出、その課題の解決に向けた話し合いを行いました。(まさに「新しい公共」の目指す形を実現)また、午後にはボランティアスタッフとして活躍していただく方の育成に向けた講座(第2回目)も行いました。前回の講習以降「聴き上手さん」として、すでに活動してみての問題点などをみんなで共有し、古賀からはいくつかの対処方法を示唆させていただきました。ポラ

ンティアスタッフとして登録して下さった方もいます。

本事業の目標と目的を着実にクリアしているのを感じます。また、新しい公共事業そのものの核となる「協働」という部分については、宮古市からの情報提供、NPO法人紫波サブリさん、市民協と複数のNPOの連携を取りこちらも着実に実行しています。

次回の会議には自治体からも職員の方にご参加いただく予定です。会議に向けた資料づくりなどを通してスタッフ育成教育にもなっています。

今後は、田中尚輝氏のブログでのコメントにあったように事業同士の連携を行うべく、宮古の事業と岩手県内で採択された他事業とをつなぐ活動を古賀のミッションとしたいと思っています。

追伸：本活動の様子を11日、12日にNHKが取材にくる予定です。6月14日の午後6時10分からの「おばんですいわて」でレポートとして放送される予定そうです。

※本メルマガが6月15日発信のため放送後の記載になったことご了承ください。

(編集追記)

【福島通信】

(安部 白道)

市民協総会で名刺交換したばかりのC3NP・澁谷恭子さんから電話が入った。南相馬市に来ているとのこと。ちょうどその日、島津禮子代表が福島入りされていたので、合流して福島沿岸部の仮設住宅の情報交換をすることになった。

澁谷さんらは南相馬の仮設でTV電話による健康相談支援を行っているという。翌日島津代表、須田さんと3人で同市「小池第③」仮設住宅を訪問した。ハードと通信を担当しておられる大橋哲男さん(ワールドインテック社)に伺うと、市内12カ所の仮設を巡回するかたちで実施しているとのこと。澁谷さんらはカフェを提供する傍ら、お年寄りにマッサージを施し、そっと声かけをする「ちょっと、これ(TV電話)に座って先生とお話してみませんか？」初めは遠慮がちなお年寄りも勧められて、電話機の前のいすに座り、おそろおそろタッチパネルに触れる。

ほどなく画面から都内クリニックの医師がにこやかな笑顔と声が飛び出した。緊張していたお年寄りも会話が始めると饒舌になり、すすんで体調を語り始めた・・・

この支援は、同時に傾聴ボランティアでもある。医師等の専門職がこうしたITを活用することで効率的な支援活動が継続できている。他の仮設住宅でもきっと喜ばれることだろう。